

イドフリミア 読書メモ

(梗概を読まずに本文から読み始める)

第1話 「442 Hz (ヘルツ)」

合唱パートを決める声きき。なかなか見ない文化。

一瞬、視点の主がわからない

「俺」を早めに出すと主人公が分かりやすくなる

活動名が本名でいいのか？

とりあえず主人公は理解できた。有能さらしさされているのは良いところ

メインヒロインと思われる美少女の描写が薄いのが気になる

第2話 「ドミナントセブン」

音楽周りの描写は綺麗。内的表現にも臨場感がある。

いかにも青春系の雰囲気。

直近のMFなら「青を欺く」がベンチマークになるか。

堪えられない、まるでエッチな画像を見た中学生男子のようだった。

↑若干物語の雰囲気と不釣り合い？

ヒロインに秘密が知られる。王道で良い物語の始まり方。

—ノ瀬弦華さん—今日の歌のテストで、俺が呼ばれる前に歌っていた女の子だ。クラスでも最も目立ったグループのメンバーの一人で、容姿端麗ようしたんれいかつ誰にでも明るい性格を持っているため、男女共に好かれるクラスのヒロイン的存在の女の子である。

↑説明的なので描写で見せたい。第1話で、友達と楽しく話しながら帰る姿を描写するなど。

「得意っていうか.....、まあ、人の前だと恥ずかしいじゃん？ だからズル休み♡」

↑この主人公で語尾にハートマークは違和感。相当おちゃらけたキャラじゃないと使われない。

なぜヒロインはこんな辺鄙な場所に来たのだろう。

第3話 「ドミナントセブン 2」

やばい、即既読！ ーっていうか、はい?! 放課後呼び出された?! なんで?! 話して何?! これ、どう返したらいいの?!

↑やっぱりテンションが作品とあっていない気がする。

なんでもない話かもしれない。もしかしたら、俺だけじゃなくて複数人に声をかけているのかもしれない。期待しすぎてはいけない。それでもー。

その日は、なんだかソワソワして眠れなかった。

↑主人公が何を期待しているのか、なぜヒロインが自分を呼び出したと思っているのか、もう少し補足できた方が読者にとって親切。

主人公の独白がこれでいいのかは今後次第。

ここでヒロインの詳細な描写が入る。

友達たちとの掛け合い.....だが、正直読みにくい。

「そんな二人を、私たちはニッコリ見守ってたんだ.....」

「いや、お婆さんまだいたんかい！」

「.....あんたら、いつまで弦華の冗談で盛り上がってるの」

ここまで会話に加わっていなかったボーイッシュな女の子がようやく口を挟む。

↑このあたり、状況を想像しなければ読めないのが読者に負担がかかる。一気に出る登場キャラとしても多い。もっと短く。

ここで再びメインヒロインの説明が地の文で来るが、さっきもあった。
重複するのならさらっとでいい。

ストーリーの進みに関係のない独り言のような地の分も多いので、読み手によっては遅いと感じるかも。

別のヒロインが登場。

真っ先に気になったのは、メインヒロインと口調がかぶっていること。どちらかを変えたい。

絵梨歌を敬語キャラにしてしまうとか。

「—でも、私は一ノ瀬さんを怖いと思うことがあるよ。人と接するのが上手で、いつも楽しそうで、明るくて—怖い。本心がどこにあるのが見えなくて、ものすごい嘘つきみたいで、怖い。私は、ああはなれないから.....」

↑同級生に対してのコメントとしてはかなりマイナス表現なので注意が必要。絵梨歌が嫌なやつに見えかねない。

第4話 「ドミナントセブン 3」

曲のイントロが好きだ。

まだ形になっていないイメージが無限に広がって、どこまでも期待に胸が膨らむから。

始まりのようっていて、実はその先の全てを、すでにその身に宿しているから。

↑これ、果たしているのだろうか

学校終わりなら学校で待ち合わせた方が自然なのでは.....？

他の生徒に見つからないような待ち合わせ場所だったことに、もうちょっと主人公は思うことがないのか。

なるほど、音楽活動。

ミュージックビデオ制作。目的が提示される。

ヒロインの言い分は結構めちゃくちゃ。

言い換えれば、説得力、リアリティが足りない。

—本当は、気づいているんじゃないか？ ということだ。

↑読者の気持ちを代弁できている。良いシーン。

第5話 「ドミナントセブン 4」

—ノ瀬弦華さんの「ミュージックビデオ制作を手伝ってほしい」という話を承諾した俺は、具体的なプランについて—プロジェクト初となる打ち合わせのために、クラスでも指折りの人気女子と二人で安価なイタリアンにやっていた。

↑これはちょっとまずい。

承諾は物語の大きなターニングポイント。

その瞬間を描写して、主人公とヒロイン、両方の考えを読者に示すべき。流してはいけないところ。

丁寧に。

キャラクター、特に主人公が変化するシーンは物語の見所。

ファミレスのシーン。これだけしか会話を交わさないのあーなら、ここはなしですぐ帰路に話を移してもいい。

名前呼び、早いな

話がゆったり進んでいく。欲しいシーンの描写も省かれてしまっている感じ。

第6話 「倚音（いおん）」

毎回冒頭に挿入されるポエムのようなもの、ウェブなら読んでいられるが、新人賞の原稿になると読みづらそう。

新キャラ登場

女の子の名前は門咲凜音かどさきりんね。一年生の頃同じクラスだった女の子で、そのツンケンとした振る舞いから、気の強い女の子が好きな一部の男子から大変人気を集めている生徒だ。

↑この辺りも描写を先に持ってきてほしい。ツンケンとした振る舞いを主人公との絡みで見せてから説明に入る。

凜音は「自由奔放に走り回ってそれで多くの人から愛されている姉」とは違う存在であろうとしている。

↑ここも同様。

「知り合いの MV 制作を手伝う」て言われたらもっと深掘りして聞くのでは？

ラノベらしい典型的なキャラ造形・展開と作品の青春雰囲気若干ミスマッチ。
どちらかに寄せた方がいい。

普通は部屋に録音機材なんてないが、シンガーバレを中止しなくて大丈夫なのか

第7話 「倚音 2」

最初のレコーディングがどうなるのか期待したが、シーンが移り変わってしまった。

もう音源の録音が終わった。展開が早い。

というより、順調すぎる？

絵梨歌がやってきて波乱発生。

すんなり解決

涙目でまくし立てるといふ絵梨歌のリアクションに対し、2人はもうちょっとと思うところがないのか。

なかよしこよしで収束。

思ってたよりそういう雰囲気の話なのか。

絵梨歌が仲間に。

微笑ましい感じの展開。ラノベというより児童文学のノリ？

やっぱりドラマが薄いかな。

キャラが典型的の範囲を超えておらず、薄い。

ヒロインはなぜシンガーソングライターになりたいのか。

主人公はなぜシンガーソングライターになったのか、そしてなぜ歌うのをやめたのか。

キャラの価値観を形作る重要なところを説明せずに進んでいる。

第8話 「倚音 3」

やっぱり冒頭ポエムはいらない。

私服ヒロインの描写はよき。

絵梨歌がセンスを発揮。

まるで『秀・叶・』だったら大丈夫って丸投げしてるみたいに見えて、私にはちょっと疑問だった.....」

「「—っ！」」

俺と弦華が、おそらく全く違う理由で同時に息を詰まらせる。

ほう。

絵梨歌は主人公がシンガーソングライターであることを知ってたのか。

読み飛ばしていた？ 書いてあった.....？

誰に公表しているのかがここで初出だとさすがにちょっと遅い。

正体を知ってる人はもう1人しかいない。つまり凜音は知らない。
情報提示ももうちょっとやりようがある。

第9話 「倚音 4」

MVの作り方について教えてもらっているが、シンガーソングライターだった主人公
本人の経験は生きないのか？

冬華。また新キャラ。多い印象。
別に毎回胸の描写をしなくてもいいんですよ？

特に何もすることなくシーンが終わった。何のために出てきた？

『—弦華、最近付き合い悪いよね〜』

その言葉が俺の頭の中でリフレインして、なぜか、冬華を『女王様』と呼ぶ生徒の声と重なった。

悪い予感

煮詰まったので外に出かける。
ダブルデート的なシーンだが、導入が強引で不自然な感じが強い。取ってつけたよ
うな。

やっとヒロインがシンガーソングライターになりたい理由に踏み込む。
が、これは主人公が提案を承諾するシーンでやっておくべきだと思う。

かつて主人公に感化されたヒロインが、時を経て主人公を感化させる。
定番で良い関係性。

第10話 「V→VI」

やっぱり冒頭のポエムは目が滑る。

お、ピンチがやってきた。

咄嗟の機転で解決する主人公.....だが、言うほどうまく言い訳じゃないのでは
あまりカッコよく見えない

これも主人公のキャラが弱いせいだと思われる

なぜか帰ってしまう。ミッドポイント？

第11話 「V→VI 2」

ヒロイン視点。

がっつり恋愛が絡んできた。うーん。

『.....なんで秀叶は、あんなこと言ったの!? あそこで秀叶が犠牲になることないじゃん！ とっさに嘘ついちゃうのはわかるよ？ でもさ、そういう嘘って、普通は自分を守るための嘘なんじゃないの?! なんて咄嗟に出た嘘が、私を守るための嘘なの?!』

↑このへんの激高とかあまり感情移入できない。

2人で撮影に。

第12話 「V→VI 3」

再び歌わない理由をだいぶ引っ張る。

建前で良いので、やめた理由を最初に示しておいた方がいいのでは。

もう全部終わるんだ。

撮影はつつがなく進行。

「ねえ『秀叶』、どうして歌うのをやめちゃったの.....?」

いいですね。ミッドポイント。

第13話 「Polyphonic lines」

たとえば彼女が『秀叶』の動画のスクショをロック画面に設定するほどのファンでも、俺の歌声を空き教室で聞いてしまっていたとしても、謎なぞに録音機材が揃っている部屋を見ていたとしても、それでも彼女は俺の正体に気づいていないと、そんな幻想を盲目的に信じてきた。

↑こう見ると「なんで？」となる。

「—俺、人の顔を思い出せないんだ」

ほう。聞いたことはある病気。

歌を始めた理由は良い過去。

だが、相貌失認がこの後の物語に絡んでくるのかは気になる。

別に父親の死だけでもいいっちゃいい。

歌詞を載せられても読まないかなあ。

歌を辞めた理由は結構普通。

一連のシーンは良いものだが、ミッドポイントに持ってくるには早い気が。

この手の過去の放出、感情のぶつかり合いは、持った後で行われるのが定石。

ちょっと丁寧に読みすぎて時間がかかっているので加速。

第14話 「Polyphonic lines 2」

心情描写は読ませるものがある。武器になりそう。

構成力などの技術は後付けできる。

映像の編集には時間がかかる。作曲や録音、～

↑やたら改行が少なくて目立った

聖火の歌詞、けっこう直接的

ここでもう「歌って？」に持って行くのか

サービスシーン。

第15話 「Polyphonic lines 3」

ここにきて新キャラ??

ちょっとそれはお腹いっぱい。

ずっと示唆されていた、主人公の正体を知っている女子。

主人公の背中を押す重要な役回り。

なので、ポット出のキャラにさせるべきではない。

今までの出番が少ないキャラと合わせて一人のキャラが良い。

主人公、けっこう軽くセリフに「！」を使うのでなかなかついていけない。これはヒロインにも言えるが。

第16話 「Polyphonic lines 4」

ヒロイン視点。可愛いですね。

MVはあっさり完成。

物語を貫く外的問題（セントラルクエスチョン）なので、解決するのはまだ早い。

と思ったら、ちゃんと続きそう。

主人公が歌った……？

残り1/3残ってるけど何するんだ……？

どう見てもクライマックス。

第17話 「Polyphonic lines 5」

完全にエピローグ。

第18話 「不協和音」

5日で2,000再生。すごい。

ここで事件。まあ起きるならこれしかない。

が、ここまですと考えると小さく感じる。

本名でやってるならバレるの覚悟だとは思いますが……

第19話 「不協和音 2」

物語としては蛇足だが、これを書きたいのはわかる。

構成で解決できそうではあるが、1巻では触れないのが無難でもある。

第20話 「不協和音 3」

「……言ってなかったな。俺が活動休止した理由は、人に好き勝手言われるのが嫌になったからなんだ。ちょうど、今の弦華の状態に似てる。だから、それに立ち向かうことなく逃げ出した俺は、弦華に言葉をかける資格がないんだよ……」

おお、あっさり……

絵梨歌の反応もどうなんだろうか。

俺の願いは、あの時、弦華が思っていたのと同じこと。

俺はただもう一度—

—もういちど弦華に、歌を歌って欲しかったんだ。

想いを返すのは綺麗。だが、一巻でやるにはちょっと手数が多いか。

母さんが仕事に出たあとの誰もいない自宅の階段を駆け上がる。

↑ならすぐに家に帰っても良かったのでは

第21話 「Segno (セーニヨ) 」

イオニア旋法の説明。これに限らず、読者に見せるメリットはあまりないかも。

再会し、主人公が曲を配信する方向性に。ちょっと急展開。

第22話 「Segno (セーニヨ) 2」

絵梨歌が電話をかける。良いシーン。

ライブ開始。

やっぱり一つ一つの文章には熱量がこもっている。

でもやっぱり、ちょっとすんなり行き過ぎか。

第23話 「Segno (セーニヨ) 3」

真のエピローグ。

綺麗に終わった。

第24話 「Coda (コーダ) 」

24話、なくてもいいのでは。

梗概

最後に梗概を確認。

やっぱり転が多くてまとまっていないあらすじ。

ラストまで書かずにほのめかす書き方は良くない。

『教会旋法』と呼ばれる中世ヨーロッパの教会音楽に登場する音階達を、高校生の少女達として擬人化。

↑やはりこれは見せない方が良い。